

特別寄稿

日本人学生はなぜ留学するのか

— グローバルな移動の価値をめぐるローカルな論理 —

小林 元気

Received: 22 October 2025 / Accepted: 14 January 2026

〈要 旨〉

本稿の目的は、日本国内の大学生が自身の英語圏への留学経験を職業達成との関連においてどのように意味づけているのかを描き出すことである。英語圏の大学に1セメスター以上の留学を予定している大学生を対象として質的調査を行い、学生たちの留学動機を形成する価値規範について、職業達成を目的とした手段としての〈インストルメンタル〉／留学そのものが目的となる〈コンサマトリー〉という概念枠組みから分析した結果、次の3点を明らかにした。

第1に、インストルメンタルな意義として、高い英語能力や多角的な視野、異文化間コミュニケーションにおける積極性の獲得が、コンサマトリーな動機として冒険心や英語を話す環境に身を置くことへの憧れが語られた。第2に、留学の大衆化を背景に、学生たちは自身の留学経験を意義あるものとして差異化する必要に迫られており、数週間ではなく1セメスター以上の、遊びではなく自分を成長させてくれるような留学経験に、それぞれ価値が置かれていた。第3に、留学経験を自己成長のエピソードとして他者に語ることで職業達成につながるという、「自己成長を経由したインストルメンタルな価値志向」が存在した。

これらの知見は、大学生にとっての留学経験が、グローバルに通用する能力の直接的な証明としてではなく、自身が日系企業の求める成長志向の自己啓発的な資質をもつことを裏づけるエピソードとして間接的に活用されるという、ローカルな論理が存在する可能性を示唆している。

鹿児島大学総合教育機構・准教授

名古屋大学高等教育研究センター・客員准教授

1. 研究の背景と目的

21 世紀以降、大学生の海外留学は産学官の連携により国家政策として強く推進されてきた。その意図は「日本の若者の興味や関心を海外に向けさせ」「グローバル社会、知識基盤社会の中で逞しく生き抜く人材」を育成することであり、それは主に「日本企業の国際競争力の維持と持続的な発展のため」の「各企業を支える優秀な人材の確保」という産業界の要請を反映したものであった（産学連携によるグローバル人材育成推進会議 2011: 4）。

このように国家や教育政策が大学生の留学派遣に大きな価値を見出していることはもはや自明であるが、当の大学生にとって留学はどのように意義づけられているのだろうか。真っ先に想定されるのは、例えば「日本の留学経験者を獲得しようとする“グローバル人材獲得競争”が年々激しくなっています」（文部科学省 2017）というメッセージが示すように、留学経験が将来の職業達成において活用されるという見通しであろう。

しかしながら、国内企業の新卒人材ニーズを定点観測している日本経済団体連合会の調査によれば、「選考にあたって特に重視した点」において「留学経験」は 0.5%しか選ばれておらず、19 項目中最下位である（日本経済団体連合 2018）。加えて、国内企業の人事担当者に海外経験者の年収の優位性について尋ねた調査では、8 割以上が「変わらない」と回答しており（貝沼 2018）、学生時代の留学経験と就労後の所得の関係を全国統計調査の個票データを用いて分析した先行研究では、2 年未満の留学経験に所得を上昇させる人的資本としての効果は存在しなかった（小林 2019）。つまり、留学経験をもつ人材に対する企業側のニーズをめぐって、政府による広報と社会的現実の間に齟齬が生じている可能性がある。

決して小さくはないコストやリスクを負うことになる留学という教育選択に対して、学生たちはどのような価値を見出しているのだろうか。本稿の目的は、英語圏への留学を志向する国内大学生の価値規範の構造を描き出すことを通じて、そこに見られる論理と合理性について明らかにすることである。

2. 先行研究及び分析概念の検討

2.1 先行研究の検討

学生はなぜ留学を志向するのだろうか。この問いを明らかにしようとする研究は世界各地で行われてきた。理論的な枠組みにおいて個人を留学へと向かわせる力学を説明するのは、ブルデュー理論における文化資本の概念から留学によって獲得される学歴や資質・能力、人的ネットワーク等をとらえ、それらが社会的地位達成をめぐる競争においてアドバンテージをもたらすという見立てであった (Ong 1999、Sin 2009、Kim 2011 など)。

個人の留学経験がグローバル化した労働市場において価値をもつ背景には、英語の世界共通言語としての汎用性や高等教育における米英の大学を頂点としたヒエラルキー構造、さらにそれらの先進国の経済的優位が存在する。したがって、典型的な留学移動パターンは、アジアを中心とする非英語圏の新興国から英語圏の先進国への移動が主流となる (Ogden *et al.* 2021)。一方で、例えば英語圏の先進国間の留学や、EU 加盟国間の学生交流のように、必ずしも留学国と出身国の間に言語的／教育的／経済的な水準において大きな差がみられないような移動パターンも存在する。英国学生を例に挙げれば、英国内のエリート教育にアクセスできなかった場合の「セカンドチャンス」として、もしくは単なる冒険心や自己実現の欲求により留学する事例などが報告されている (Brooks and Waters 2011)。これらの動向は、前者が「垂直移動」、後者が「平行移動」として理念的に位置づけられ、留学の目的や結果を把握しようとする研究において両者は異なる移動パターンとして理解される (Teichler 2017)。

ところが、このような枠組みから日本の若者の留学移動をとらえようとすると、日本が非英語圏かつアジアの先進国であることからねじれが生じる。例えば、日本から米国への留学は、非英語圏から高等教育の充実した英語圏への移動という点では「垂直」的であるが、先進国から先進国への移動という点では「平行」的とみなすこともできよう。このようなねじれの存在は、日本人の留学移動のパターンやその背景にある若年層の留学志向を複雑で多様なものにしていく。

実際に、日本の大学生の留学志向に関する先行研究を概観すると、それらの結果を職業達成に関連する志向性の有無という観点から一元的に理解することは難しい。

まず、留学経験者に対して直接的に留学動機を尋ねた調査 (日本学生支援

機構 2019) によれば、「語学を本場で学びたかったから (58.5%)」「海外で勉強してみたかったから (45.0%)」「海外で生活してみたかったから (42.7%)」「国際感覚を身につけたかったから (21.7%)」といった理由が多く、「将来の就職に有利だから」と答えた者は 4.2%に過ぎない。語学力や国際感覚の獲得は職業達成と関連する可能性があるものの、将来の就職における有利さを感じていた者は少数である。

また、次の2つの質的研究は対照的な知見を提示している。正楽 (2020) では、国内大学生へのインタビュー調査により、学生たちが卒業後のキャリアを念頭においた「外国語能力」や「異文化適応力」を獲得するために留学を志向していることが報告されている。一方で、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」を利用した留学経験者（以下、トビタテ生）に対するインタビューを行った太田 (2022) は、トビタテ生が「就職のため」というわかりやすい留学動機を忌避し、「自己実現に基礎づけられた留学動機であることが文化的正統性を有している」（太田 2022: 183）と説明する¹⁾。つまり、日本の大学生の留学に対する意味づけの一端をとらえたこれらの研究では、社会的地位達成への志向性という論点において真逆にも見える知見が提示されている。

先行研究に共通する課題として、多様な留学移動パターンが十分に考慮されておらず、「留学」という単一の事象として取り扱われていることが挙げられる。コロナ禍直前の 2018 年度における日本人学生の留学先上位 8 カ国をみると、最も多かったのは英語圏先進国（1 位米国・2 位オーストラリア・3 位カナダ・6 位英国）であり、非英語圏アジア諸国（4 位韓国・5 位中国・7 位台湾・8 位タイ）が続く（日本学生支援機構 2018）。海外の先行研究において共有されてきた「垂直／平行移動」の枠組みをふまえると、これらの 2 つの主要な移動パターンの背景には異なる留学志向が存在している可能性が高い。

そこで、本稿は日本の大学生の最もポピュラーな移動パターンである英語圏先進国への留学に分析対象を限定して、「学生は自身の留学という社会的行為をどのように意味づけているのか」という分析課題を設定する。従来の留学研究においてアジア出身者の「垂直移動」として理解されてきたような社会的地位の達成に向けた志向性が、はたして日本の大学生の留学事例にも妥当するのか。もし妥当しないのであれば、どのような論理によって学生たちは自身の英語圏への留学を合理的に意味づけているのか。以降ではこれらの問いを明らかにしていきたい。

2.2 留学志向の分析概念

前項の先行研究の検討から、若者の留学志向において、従来から着目されてきた社会的地位達成との関連性に加え、そのような視点だけではとらえ切れない——経済的合理性だけでは説明できない——価値意識が存在する可能性が示されている。本稿では、留学志向のこのような側面を深く掘り下げるために、行為の価値的側面を説明する社会学的な対概念である〈インストルメンタル／コンサマトリー〉の概念枠組みを用いる。前者は「道具的」で「ある目標を達成するための手段的な志向」であり、後者は「自己充足的」で「それ自体が主体の欲求を充たす行為や関心の志向」である（高谷 2012: 519）。

これらの対概念の源流は、行為の「合理性」をめぐるウェーバーの類型論まで遡ることができる。ウェーバーは個人の反省的意識を伴う行為について、行為の目的や帰結を志向する「目的合理的行為」と、行為そのものが意義となる「価値合理的行為」に分類している（Weber 1922=1972: 39）。このような行為の合理性に対する着目は、社会や個人をシステムとしてとらえ、その「機能」に着目するパーソンズの社会システム論においても色濃くみられる。パーソンズがアメリカ社会の発展の根幹に見出したのは、「よき社会の建設」を目指す「システムとしての社会のもつ道具的活動主義（instrumental activism）という志向」であり、それは「自己-満足的」で「成就的（consummatory）」な志向性と対置される（Parsons 1964=1973: 262）。

近代社会における価値の転換に関するパーソンズの議論は、その後高度経済成長により産業社会が到来した日本でも展開されることになる。村上（1975）は、ウェーバーとパーソンズの議論を引きながら「手段的合理性」と「コンサマトリーな価値をめざす行動」を二極的な概念として位置づけ、次のように述べる。

現実の人々の行動は、純粹に手段的な価値と、純粹にコンサマトリーな価値との両極間で行われる。そのとき手段的（合理主義の）価値の極へとひきつける力は、手段が奉仕すべき目的の訴えかけの強さと、手段が目的を達成するという因果関係の確かさとの二つである。これらの要因が弱体化するとき、人々の行動原則は、手段的価値の極からコンサマトリーな価値の極の方向にひきつけられていくのが自然であろう。（村上 1975: 87、傍点は引用者）

以上の概念枠組みを本稿の問題関心に援用すれば、大学生にとって留学という社会的行為の合理性は、特定の目的に向けた手段としての〈インストルメンタル〉な意義にあるのか、それとも留学することそのものに対して何らかの〈コンサマトリー〉な価値が見出されているのか、という分析視点を得ることが可能になる。また、前者のインストルメンタルな価値志向が措定する〈目的〉に関しては、学生自身の将来の職業達成や労働を第一に想定する。なぜならば、本稿冒頭で述べたように、留学促進政策が前提する日本人若年層の留学の〈目的〉とは、グローバル市場における労働力の強化に他ならないからである。換言すれば、「グローバル人材」の育成という人的資本論に根差した政策理念は、留学に対してインストルメンタルな価値を前提しているといえよう。

そして、村上がいう「手段が奉仕すべき目的の訴えかけの強さ」と「手段が目的を達成するという因果関係の確かさ」、つまり〈学生にとっての職業達成の重要性〉と〈留学が職業達成につながるという因果関係の強さ〉という要因が、留学をインストルメンタルな価値の極へと引き寄せ、逆にそれらが弱体化すればコンサマトリーな価値の極へと引きつけられていくものと考えられる。

よって本稿では、インストルメンタルな留学志向を「職業達成を目的とした手段としての留学への価値づけ」、コンサマトリーな留学志向を「留学すること自体が目的になるような留学への価値づけ」と定義し、留学への意味付与の諸相を分析する。

3. 研究方法と調査概要

本稿の分析課題を明らかにするために、英語圏への留学を志向する国内大学生を対象としたインタビュー調査を行い、留学の意義に関するナラティブデータを「解釈主義的アプローチ」(野村 2017)により分析する。より具体的には、「社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明する」ことを目指す「理解社会学」の立場(Weber 1964=1972: 8)から、留学という社会的行為をめぐる大学生の主観的な意味世界を解釈・理解することを目指す。

インタビュー対象の設定に際して、英語圏に「1セメスター以上の期間留学する」ことを「予定している」学生という条件を設けた。留学期間を1セメスター(3か月)以上としたことについては、次の理由による。2010年代

において国内大学生によって最も多く実践されてきたのは 3 か月未満の短期プログラムである（日本学生支援機構 2020）が、3 か月未満の海外渡航に対する大学のステークホルダーからのまなざしは必ずしも好ましいものではない。日本学生支援機構による「第二種奨学金（短期留学）」の対象となる留学は「3 か月以上 1 年以内」であるし、経済同友会は大学生に対して「留学というからには、3 カ月は行ってほしい」と要請している（朝日新聞 2019 年 3 月 3 日全国版朝刊）。すなわち、国内大学生が実践する留学のうち、より正統的なものとして社会的評価を受けているのは 3 か月以上の留学だといえる。よって、留学の実践主体である大学生の意味付与の諸相がより明確に観察できると考えた。

次に、留学を「予定している」学生という条件は本調査のユニークな特徴である。これまでの日本人学生の留学動機形成に関する先行研究は、留学経験後の学生に対する回顧的インタビューが中心であり、実際に留学を決定した時点とインタビュー時点のタイムラグが大きい。本調査では留学を決定した直後の学生にサンプルを限定することで、留学動機が形成された当初の留学に対する価値意識に焦点を当てて分析することが可能になる。

以上の調査対象の条件を設定したうえで、大学種別や立地条件の異なる関西・九州地区の複数大学に対して、主に留学支援部署や関係教員を通じて学生調査を依頼した。インタビュー어의選定に際しては、性別、所属大学の入試難易度、学部の多様性に配慮してサンプリングを行い、表 1 に示した 5 大学 13 名の大学生を対象として、2019 年 5 月から 8 月にかけて半構造化インタビューを行った。

分析のプロセスとして、まず「キャリア展望と関連した留学経験の意味づけ」に関する語りを抽出し、インストルメンタル／コンサマトリーの分析枠組みに即したコーディングを行い、留学動機に関する 2 つのカテゴリーを作成した（① インストルメンタルな意義、② コンサマトリーな意義）。次に、留学経験の価値規範に関して別の 2 つのテーマに一貫性が観察されたため、2 つのカテゴリーを構築した（③ 留学の大衆化と差異化、④ 留学経験をエピソードとして語るができるか）。その後、③④の含意をふまえ、①②には分類できない新たな留学動機の存在を仮定し、1 つのカテゴリー（⑤ 自己成長を経由したインストルメンタル性）を加えた。

以下では、5 つのカテゴリーの作成順序に則して、学生の語りを引用しながら分析と論述を行う²⁾。

表1 インタビュー対象者

仮名	性別	大学 所在地	大学 種別	学部	学年	留学先	留学予定プログラム	留学期間
Aさん	女性	九州	公立	文系	3	カナダ・ フィンランド	語学学校 → 大学での単位履修	約1年
Bさん	女性	九州	公立	文系	3	米国・カナダ	カレッジでの語学学習 + 単位履修 → 語学学校 → インターン	約1年
Cさん	男性	九州	公立	文系	3	米国	カレッジでの語学学習 + 単位履修	約半年
Dさん	女性	九州	公立	文系	3	カナダ	語学学校、インターン	約1年
Eさん	男性	近畿	国立	文系	3	英国	大学での単位履修	約1年
Fさん	男性	九州	国立	理系	2	英語圏	語学学習希望	約1年
Gさん	女性	近畿	国立	文系	3	オーストラリア	大学での単位履修	約1年
Hさん	女性	近畿	国立	文系	4	米国	大学での単位履修	約1年
Iさん	女性	近畿	私立	文系	2	米国	カレッジでの語学学習 + 単位履修	約1年
Jさん	女性	近畿	私立	文系	3	米国	カレッジでの語学学習 + 単位履修	約1年
Kさん	女性	近畿	私立	文系	2	米国	カレッジでの語学学習 + 単位履修	約1年
Lさん	女性	近畿	国立	理系	2	米国	大学での単位履修	約半年
Mさん	男性	九州	国立	理系	3	オーストラリア	語学学校 → インターン	約3か月

4. 分析

4.1 インストルメンタルな意義

留学成果の見通しとしてまず挙げられるのは、「英語がメインですね (Jさん)」「単純に語学です (Fさん)」「語学はまあ、スピーキング力とかは一番に活きると思うんですけど (Dさん)」「[英語が] 喋れたらいいことあるかなっていう (Gさん)」「英語を結構なレベルで話せたら (Iさん)」というように英語能力である。

では、英語能力はどのように就労につながると考えられているのか。「昔みたいにこの人は英語話せるから有力だ、とはならないかもしれないですけど、仕事の幅も広がるかなっていうのは思います (Gさん)」「英語ができたり、海外でのボランティアの経験とかあったら、なんていうかな、働ける選択肢が増えると思います (Hさん)」「海外のほうに広がるかなっていう、就職先が。外資系っていうか (Iさん)」といった学生たちの語りからは、英語能力が職業達成における自身の競争力を高めるといような強いメリット意識ではなく、キャリアの選択肢を広げてくれるという期待がうかがえる。

続いて、英語能力の獲得以外に就労につながる留学成果として挙げられた内容をみていこう。

B：他の国の人と関わることで、自分の考え方の幅も広がるし、感じ方とか価値観も変わる。それが、物の見方とかも多角的になって、広い視野で仕事できるんじゃないかなっていうのは考えてます。

K：やっぱり海外に行ったら、日本の文化じゃなくて他の文化に触れるから、いろんな文化を知れるってことで人をいろんな角度から見れる力がつくかな。

これらの語りから、留学することで物事を広く多角的にとらえる能力が獲得され、それが仕事にも活かされるという見通しがうかがえる。そしてもう一点、複数のインタビューイーに共通する要素がある。

E：結構日本の人とかたぶん、あるじゃないですか、[外国人に対して] 構えちゃうところ。(中略) 外国の人となんかするってなったら、

ちょっとビビるじゃないですか。(中略)それが1年ぐらい行ったらまあ…気持ち的に対等にいけるかなあと。

ここに見られるのは、一般的な日本人が国際的なコミュニケーションの場において臆したり控えめであるという情意面での課題意識であり、留学によってそれが解消されるだろうという期待である。つまり、外国人とのコミュニケーション場面において堂々と振る舞うことが、将来の職業労働において重要になるとみなされているのである。

4.2 コンサマトリーな意義

続いて、職業達成とは関連しない価値志向についても検討していく。工学部で学ぶFさんは将来ロボットに関する研究職に就くことを目指しているが、所属大学の連続性のあるカリキュラムを留学によって中断することが望ましくないと指導教員にアドバイスされながらも、あえて留学を目指す理由について、次のように答えている。

F：人生1回しかないから、その、留学行く人と行かない人だったら、行かない人のほうが圧倒的に多いから。なんかちょっとみんなと違うことしてみたいなていう気持ちはあります。

*：冒険的な？

F：まあ、そうですね。でも行かないで後悔するよりも行って後悔したほうがいいかなっていうのも。

*：なるほど。ロボット研究にダイレクトに英語が役立つっていう気持ちよりも、その冒険的な気持ちのほうが大きいですか？

F：あ、はい、そっちです。あ、どちらもですね。

Fさんの「みんなと違うことしてみたい」という動機は職業達成に関わるものではなくコンサマトリーな価値意識であるが、筆者からインストルメンタル（ロボット研究における英語の重要性）よりもコンサマトリー（冒険的な気持ち）な意義が大きいかと問われると、一度は肯定したうえで「どちらもですね」と言い直している。このやりとりから、Fさんにとって「みんなと違うことをしてみたい」というコンサマトリーな動機が、職業達成を目指したインストルメンタルな動機と同等以上の価値をもつことがうかがえる。

同じくコンサマトリーな動機として、Aさんは留学がキャリアにおける強みにならないと思いつつも、奨学金を借りてでも実践したいと考えた理由について、以下のように語っている。

A：憧れ…はたぶんあると思います。英語を喋りたいっていう。喋っている環境に自分がいたいっていう。なんだろう、なんか自分が知らないところに行きたいなと思っていて、時間が許される時に。大学生って自分が好きなことをできる時間がたくさんあるから、その時間を無駄にしないというか、うまく活かせるのが留学かなって。

*：それはキャリアにつながらなくても構わない？

A：うん、全然。

筆者が「憧れ」というキーワードを提示したことをきっかけに、Aさんは「英語を喋りたい」「喋っている環境に自分がいたい」などの欲求を「自分の好きなこと」として語っている。英語を話す環境に身を置くことが憧れの対象になるということは、英語圏への渡航そのものが目的化されるコンサマトリーな志向性だといえよう。そして、留学経験がキャリアにつながらなくてもよいのかという筆者の質問に対して、「全然」と答えていることから、Aさんにとっての留学の意義は、インストルメンタルよりもコンサマトリーな価値づけを多くともなうものであることがわかる。

4.3 留学の大衆化と差異化

ここまで、インストルメンタル／コンサマトリーな価値意識に関するインタビューの語りを取り出してきたが、両者は断片的に点在している。以下では、それらの価値意識が自身のキャリア展望をふまえてどのように関連づけられ、そこに留学の合理性がどのように意味づけられているのかについてさらに分析を深めていきたい。

先に述べたように、大学生の留学経験のインストルメンタルな価値は、英語能力や広い視野、グローバル環境で物怖じしない積極的な態度の獲得機会として位置づけられていたが、そのような資質・能力の希少価値はどのようにとらえられているのだろうか。

H：ただ英語ができるとかだったら、もっと上手な人はいっぱいいるから、そんなに強みにはならないかな。

他のインタビューイーもおおむね同様の認識を示しており、学生たちは留学という選択肢はすでにありふれていてそれだけでは強みにならないと考えている。Bさんの以下の語りは、さらに手厳しいものである。

B：私の友達が〇〇大〔一部の学部で留学が必修の大学〕に行ってるんですけど、全部〔全員〕留学に行けるわけじゃないですか。(中略) 英語圏と中国語圏に半年ずつ留学とか。そういう子たちがずっと遊んでる〔SNSの〕ストーリーとか見てて。(中略)〔就職活動では〕そういう子たちと一緒に並べられるんだろかなと思って。だから〔自分が〕学校の代表として〔交換〕留学行きましたって言っても、「どうせお前もあの子らの一員やろ」って思われるのは確かやろかなと思ってます。

*：へええ。じゃあ留学っていうと企業は海外で遊んできたイメージでみるんじゃないかという前提があるんですね？

A：うん。

Bさんの見立てでは、大学生の留学の大衆化によって、留学経験が「遊び」として企業にみなされることが危惧されているのである。このように、留学の大衆化という社会状況は、留学経験の希少価値の低下を意味するものとして学生たちには理解されている。そしてそのような状況の中で、学生たちは自身の留学経験の意義を、大多数の平凡な留学経験とは異なるものとして差異化を図る必要に迫られる。差異化の指標として言及されているのは、留学期間と内容である。

A：今って1週間でも海外に行ったら留学しましたって言えるじゃないですか。なんかそういう薄っぺらい留学っていうか、異文化体験のようなことを「留学留学」っていうのがほとんどだと思う。そこ〔外国〕に行って実際に何をしてきたのかが大事っていうか、その人がなんで海外に行く必要があったのかが、そういうことが自分だと強みになると思っていて。大学生全般だとそういう人は少ないと思うので。

C：ワーホリとかだと、現地に行って遊ぶっていうイメージが僕の中ではあったり。あとまあただ〔留学に〕行くだけじゃ評価はされない。現地で何を学んだか、そういう内容が大事なのかなと。(中略)友達が2週間〔の海外研修に〕行っても、現地での話聞いたらめっちゃ買い物したとかそういう話しか聞いてないんで。短い期間の留学だとそういった遊びのほうに走ってしまうと思うんで、行くなら長期がいいかなと。

Aさんは1週間の異文化体験的な海外渡航を「薄っぺらい留学」と断じ、海外で「実際に何をしてきたのか」が重要であるという。Cさんもワーキングホリデーや2週間程度の海外実習では学生が「遊びのほうに走ってしまう」ため、「行くなら長期がいい」と話す。つまり、長期>短期、学び>遊びという図式によって、同じ留学というカテゴリの中でも、自身が予定している1セメスター以上の留学の意義について、短期間の研修やワーキングホリデーとの質的差異化を図っているのである。

4.4 留学経験をエピソードとして語ることができるか

留学の期間や内容が重要だとする差異化戦略は、必然的に自身の留学経験が意義深い内容であることを〈他者に語るができるか〉という前提をもつことになる。

D：そこで自分がどういう風に生活して、どんなふう感じて、それをどのように発信するかによって、大切さが変わってくるかな。

*：発信ていうのは？

D：伝えかたとか。

*：〔就職活動の〕面接の場で？

D：語れるかどうかです。

Dさんは、他のインタビューイー同様に留学の内容が重要だとしながら、留学中に「自分がどういうふうに生活して、どんなふう感じて」という自身の留学経験を「どのように発信するか」「語れるかどうか」が大事だという。類似する語りは他にもみられる。

G：「留学しました」だけじゃなくて、「留学をこういう目的でして、こういうことが得られて、自分にこうつながってます」みたいな、そういうのは言えるようにならないと、ただ〔留学〕しただけじゃ意味がないなっていうのは思います。で、自分の今にこうやって影響しているとか。そういう感じの論理的なのは言えないといけないなと思うんですけど。

B：〔就職活動の〕面接で留学の経験をどうやって話すかはこっち〔自分〕なので、私がしっかりうまくちゃんとしたこと言えば、「この子はただの留学してた子やないんやろうな」と思ってもらえるやろうし。

「言えないといけない」「どうやって話すか」「うまくちゃんとしたことと言えば」。これほどまでに、学生たちは留学に出発する前の段階で、帰国後に自身の留学経験をエピソードとして物語る必要性をひしひしと感じている。こうした学生の実感には、大卒採用活動において面接試験が重視される（小山 2014）という日本の雇用慣行が大きく影響していると考えられる。なぜなら、面接試験においてエントリー学生が求められるのは、彼／彼女たちの人物像を査定するための「注力エピソード」（小山 2010）——大学生活で重点をおいて取り組んだ活動に関する〈語り〉——だからである。

日本の大卒採用活動で人事担当者が求めているのは、英語能力や異文化環境における積極的態度的なものというよりも学生時代に何かに熱心に取り組んだエピソードであるという予期は、国内で体育会系の部活動に没頭してきた学生の次のような語りにも表れている。

E：〔留学は〕一応評価をされると思うけど、部活でがんばってきたのとあんまり変わらないかなって…くらいのあれかなと。

*：部活？

E：体育会とか、プラスアルファの1つぐらいの位置で、留学が当てはまるぐらいなんかなあって。

小学1年生から大学で留学を決意するまで野球に取り組んできたEさんは、ローカル社会で野球というスポーツを継続してきたことと、これから実践する英国での1年におよぶ留学経験が、日本の大卒採用活動での評価と

して「あんまり変わらない」という印象をもっている。つまり、留学経験によって蓄積されたグローバルな資質・能力が評価される側面よりも、あくまで大学生活の「注力エピソード」として留学経験が語られる側面の方が大きいという評価構造を、学生自身も認識しているのである。

4.5 自己成長を経由したインストルメンタル性

このように、日本の大卒採用活動が学生に〈語り〉を求める制度的慣行は、学生たちの留学経験に対するインストルメンタルな意味づけにも大きく影響することになる。就職活動における評価の対象が、具体的な能力そのものではなく大学生活でのエピソードにあることから、どのように留学経験のエピソードを語るができるかが焦点化される。このことは、表面的には留学と職業達成との関連性が存在しないように見える学生たちの語りの中にも、実はエピソード語りを手段としたインストルメンタルな志向性が存在する可能性を示唆している。

E：就職するまでのプロセスっていうか、何したいかっていうのは考えないと。就職したあとに自分がどういうふうにやりたいかっていうのを見通しするために留学するほうが大きいんで。(中略) 就職のためのステータスを増やすのはそんなに大事じゃないかなあって。

G：仕事とのつながりは、自分も何かまだこれに絶対なりたいって決めてるわけじゃなくって。自分がニュージーランド〔の短期研修に〕行って変わったように、今回〔の留学〕もたぶん何か変わると思うんで、そのあとまたしっかり考えたらいいかなって。今は選択肢を作っというて、それを帰ってきた自分が選べばいいかなっていうのを思ってた。

Eさんはまず、就職活動のことを全く考えずに留学を決めたと言明しており、表面的には留学に対してインストルメンタルな価値づけを行っていないように見える。しかし、留学は「就職したあとに自分がどういうふうにやりたいかっていうのを見通しするため」の「プロセス」であるとも話している。つまり、Eさんの職業達成における留学の意義は、「ステータスを増やす」ような能力や資格の獲得ではなく、「自分がどういうふうにやりたいか」

を「見通す」ことがより望ましい職業達成につながるという間接的なプロセスにある。

Gさんも、現時点でのキャリア目標は公務員であるが、それは「絶対なりたいて決めてるわけじゃなく」と暫定的である。そして、留学を経て自分自身が「たぶん何か変わる」ことを予期しており、「今は選択肢を作っというて、それを帰ってきた自分が選べばいい」と考えている。

これらの留学志向は、〈インストルメンタル／コンサマトリー〉の枠組みにおいてどのようにとらえられるだろうか。「やりたいこと」という価値づけの主体はEさん自身であるが、現時点で「やりたいこと」の内容は本人に把握されていない。Gさんも、留学出発前の時点で具体的なキャリアビジョンを有してはいない。ここにあるのは、留学という環境変化を通じて将来「やりたいこと」が明らかになるだろうという見通しである。

このように、「やりたいこと」やそれを自覚している「本当の自分」が確かに存在し、現時点でその内実は明らかではないものの、自身に対して何らかの働きかけを行うことで将来そのようなセルフイメージが実現されるという理路は、近年の就職活動の自己分析においてみられる「現在の分析、未来の想像を通して『本当の自分』を抽出する志向」（牧野 2010: 150）と重なる。このような自己啓発的な自己分析に対する社会的要請は、企業が求める人材の要件として、近年「学生が自分自身をどのようにとらえ、どのような働き方・生き方を選ぶのかということへのまなざし」が強化され、「自分で自分を成長させる『自己啓発』の意志がより重視され」るようになったこと（岩脇 2004: 323-4）にも表れている。

次の語りは、海外留学という学生時代のチャレンジが、他者への〈夢〉の語りを前提とした自己啓発的な側面をもつことをよく表している。Dさんは、大学2年時に参加した学生団体での活動を振り返り、そこで知り合った他大学の学生から影響を受けたことを次のように語る。

D：やっぱ留学行った人とか、世界一周した人とか、バックパックでヨーロッパ1周したとか、自分の常識を超えた人がいっぱいいて。同じ学生なのに意味がわかんない経験をしている人がいっぱいいて。それこそその人たちもすごくかっこよくて。自分の経験を語ったりとか、夢を語ったりとか、めちゃくちゃかっこいいと思って。自分今のままじゃちっぽけだなと思って、もっと自分が胸はっていえることを増やしていきたいっていうのが強くなりました。

Dさんの留学志向は、具体的な職業を目指すのではなく、自分の経験や夢を語る事ができる「かっこいい」セルフイメージを目指した自己実現欲求であり、一見コンサマトリーに見える。しかし、彼女の夢は漠然としているものの、将来に向けて構想されており、〈いま、ここ〉の充足を目指すコンサマトリー性とは異なる。よりよい未来を実現するための手段として現在の自己成長が目指されており、留学はそのための手段の一部なのである。

近年の移民研究では、人生が停滞せず「うまくいっている」というような未来の望ましい在りかたへと変化していく感覚を「存在論的移動」としてとらえ、物理的な移動に着目されがちな国際移動の複雑性や多様性を把握することの重要性が論じられている（Hage 2005=2007: 40-1）。このような視座からD・E・Gさんの留学志向について考えるならば、それらは社会的地位達成につながるという狭い目的において直接的な意義をもつというよりも、ライフコースが多様化する社会の中で留学を通じて「やりたいこと」を発見し、人生や自身の「存在」をよりよい方向へ「移動」させたいという目的意識に連なるものとして理解するべきだろう。

以上を総合すると、学生たちは具体的なキャリア目標に向けた備えとして具体的な能力を獲得しようという志向性ではなく、暫定的なキャリア観ゆえに漠然とした自己成長や自己啓発を志向している。そして、海外留学は国境を越えた移動や学習という物理的な側面のみならず、望ましい成長を遂げた未来への「存在論的移動」のための合理的な手段としてみなされているのである。

このような志向性を〈インストルメンタル／コンサマトリー〉の枠組みでとらえるならば、「自己成長を経由したインストルメンタルな留学志向」として解釈できよう。すなわち、一見職業達成との直接的な関連が欠落しているためにコンサマトリーに見える留学志向であっても、学生たちの留学目的は自己を変革して成長させることにあり、そのような自己成長は就職活動におけるエピソード語りを通じて全般的な職業達成へとつながることが漠然と予期されているのである。留学に対してこのような期待を置くことで、留学前の時点でキャリア目標が曖昧であることは問題ではなくなる。そして、留学経験は自己成長のための機会であることから、短期間よりも長期間、遊びよりも学びであることが、より正統的な留学のあり方として意味をもつのである。

これらの論理は、留学志向のインストルメンタルな側面に光を当てた正楽（2020）と、トビタテ生のコンサマトリーな自己実現志向についてありふ

れた動機からの卓越化とみなした太田(2022)という対照的な先行研究の双方に重なるものである。前者において指摘された「外国語能力」や「異文化適応力」への志向性は、将来のキャリアの前段階にある自己成長に向けた奇貨でもある。また、後者で説明された個人の興味関心に動機づけられた留学への志向性に関して、非トビタテ生を中心とした本稿のインタビューイー³⁾からは、「『就職のため』に留学する人からの卓越化」ではなく、より良い未来の自分への変化を漠然と期待する「存在論的移動」への憧憬として語られた。先行研究の知見はそれぞれ大学生の留学志向の一部に焦点を当てたものであるが、「自己成長を経由したインストルメンタルな留学志向」という視点を導入することで、学生たちの断片的な語りの背後に存在する目的合理性を体系的に理解することが可能になる。

5. 本研究の意義と課題

本稿で得られた知見は次のようにまとめられる。

英語圏への未来の留学経験がもたらすインストルメンタルな価値として、高いレベルの英語能力や多角的視野、異文化コミュニケーションにおける積極性といった資質・能力の獲得が挙げられた。しかしそれらは就労におけるアドバンテージを生むという具体的な見通しというよりも、将来の職業に関する選択肢を広げてくれるのではないかという漠然とした期待であり、職業労働との関連性が具体的に想定されているわけではない。また、周囲の学生とは違う冒険を試みたい、日常的に英語を話す環境に身を置いてみたいといったコンサマトリーな価値に関しても重要な動機として語られた。

一方、学生たちの留学という社会的行為の合理性を理解するためには、表面的にはコンサマトリーに見える留学動機を、自己成長を経由して社会的評価につながっていくというインストルメンタルな価値意識として解釈する必要がある。留学が大衆化した現在において、インタビューイーたちは自身の留学経験をありふれた留学から差異化する必要に迫られる。そこで語られるより望ましい留学とは、短期間(数週間)ではなく長期間(1 Semester以上)の、遊びではなく多くの学びが得られ、自身が成長できる自己啓発的な経験である。

学生たちの留学に対する価値意識が自己啓発と関連して形成される背景には、日本社会でのローカルな職業達成をめぐる企業の大卒採用活動という外的要因がある。日系企業の大卒採用活動においては、学生たちの非認知

能力や人間性を判断するための「注力エピソード」が重視される慣行が存在し、近年は「成長志向」や「自己啓発の意志」が好感されるようになってきている。これらの構造的要因により、海外留学を通じた自己成長は就職活動でエピソードとして語られることで評価の対象となる。しかもそれは特定の職種に限定されることなく、幅広く役立つインストルメンタルな価値を発揮することが見込まれる。

このように学生たちの価値規範を解釈すれば、留学経験が就労後の所得を高めないという先行研究をふまえ、学生の留学志向には経済的合理性ではなく別の合理性が存在するものとして理解することが可能になる。それは、留学というグローバルな実践の成果が国内企業のローカルな採用活動の文脈で評価されるというギャップの中で、自己成長を奇貨として職業達成や豊かな人生を目指すという、自己啓発的な目的合理性である。

これらの知見は、第一に、教育政策が海外経験で獲得される資質・能力について職業達成に有利に働くことをほのめかしながら留学を強く促進してきた中で、実際に留学を志向する学生たちは必ずしもそのような価値意識を内面化していないということを示した点で重要である。学生たちは留学経験そのものが直接的に評価されるアドバンテージには懐疑的であり、「やりたいこと」が明確な成長志向の人材を求める日系企業の雇用制度を念頭に置いて、そこに自身の留学と成長の見通しをうまくマッチングさせながら、望ましい資質・能力の社会的構成を図ろうとしている。このことは、日本の大学生の英語圏への留学動機を「垂直移動」という既存の枠組みだけで把握することの困難を示唆する。なぜならば、学生が成長できる移動経験は必ずしも「垂直」である必要はないからである。

第二に、「自己成長を経由したインストルメンタルな留学志向」という価値志向に着目することで、大学教育は学生たちの私事的な成長志向とどのように向き合うべきか、という課題が改めて浮かび上がる。高澤・松井(2021)が指摘するように、学生は正課の授業だけではなくキャンパス内外での諸活動を含む複数の場面での経験を関連づけ、学びを深め成長していく。したがって、大学教職員は「グローバル人材」という狭い人的資本イメージの枠に捉われるのではなく、より広い射程で留学を通じた学生たちの学びに言語的な輪郭を与えるプロセスをサポートし、その成果を各大学のカリキュラムやキャリア教育・支援とどのように接続していくのかを考えることが重要になるだろう。

本稿に残された課題として、調査対象が日本の大学生にとって最も一般

的な英語圏先進国への留学に限られていることが挙げられる。もう一つの主要な移動パターンである非英語圏のアジア諸国⁴⁾をはじめ、その他の非英語圏の先進国や新興国、英語圏の新興国への留学事例まで含めて、本稿で抽出された留学志向がどの程度妥当するのか、もしくは別の論理や価値規範が存在するのかが体系的に検討される必要がある。これらは今後の課題としたい。

注

- 1) トビタテ生は全国的な選抜プロセスにおいて留学動機や計画を審査され、選考通過後も事前／事後研修の場で一堂に会し、自身の留学の意義や成果についてのプレゼンテーションを求められる(船橋 2019)。全留学者数に占めるトビタテ生の割合が1%に満たない(2018年度)ことも踏まえ、絶えず留学実践の卓越化を求められ続けるという特殊な社会状況に置かれたトビタテ生の価値志向が一般的な大学生にも妥当するかどうかは、改めて問う必要があるだろう。
- 2) インタビューイの語りの引用箇所において、筆者による補足を〔〕、筆者の発言を*で示している。
- 3) 表1の13名の学生のうち、トビタテ生は3名である。
- 4) 国内大学生のアジア圏への留学志向を分析した Iwabuchi and Shimauchi (2023) は、アジア圏のポップカルチャーという新たなコンサマトリー性や、アジアについて無知であるという理由でアジアへの留学を避ける「無知の戦略」など、近年の特徴的な志向性について指摘している。

参考文献

- Brooks, R. and Waters, J., 2011, *Student Mobilities, Migration and the Internationalization of Higher Education*, Palgrave Macnullian.
- 船橋力、2019、『トビタテ！世界へー「世界」と「日本」、そして「自分」を再発見する留学のすべて』フォレスト出版。
- Hage, G., 2005, “A Not So Multi-Sited Ethnography of a Not So Imagined Community”, *Anthropological Theory*, 5(4): 463-75. (=2007、塩原良和訳、「存在論的移動のエスノグラフィー」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う：現代移民研究の課題』有信堂、27-49。)
- Iwabuchi, K. and Shimauchi, S., 2023, “Inter-Asian Perceptions of Studying ‘Abroad’ in Asia: Analysis of Japanese Students’ Discourse”, *Globalisation*,

- Societies and Education*. [DOI: 10.1080/14767724.2023.2272739]
- 岩脇千裕、2004、「大学新卒者採用における『望ましい人材』像の研究－著名企業による言説の二時点比較をとおして」『教育社会学研究』74: 309-27。
- 貝沼知徳、2018、「留学のキャリア・雇用に関するインパクト：日本企業は留学経験者をどうみているのか」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編著『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』学文社、211-58。
- Kim, J., 2011, “Aspiration for Global Cultural Capital in the Stratified Realm of Global Higher Education: Why Do Korean Students Go to US Graduate Schools?”, *British Journal of Sociology of Education*, 32(1): 109-26.
- 小林元気、2019、「日本人学生の留学経験は就労後の所得を高めるか－大学教育における留学の意義再考」『大学教育学会誌』41(1): 97-106。
- 小山治、2010、「なぜ企業の採用基準は不明確になるのか：大卒事務系総合職の面接に着目して」荻谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学：データからみる変化』東京大学出版会、199-222。
- 小山治、2014、「学業に関する自己PR頻度は内定獲得率を高めるのか－能力シグナルの社会的構成説に着目して」『大学評価研究』13: 87-99。
- 牧野智和、2010、「「就職用自己分析マニュアル」が求める自己とその機能：「自己のテクノロジー」という観点から」『社会学評論』61(2): 150-67。
- 村上泰亮、1975、『産業社会の病理』中央公論社。
- 文部科学省、2017、「留学経験が就職活動のプラスに！」。(https://tobitate-mext.jasso.go.jp/news/detail.html?id=26, 2025.10.21)
- 日本学生支援機構、2019、「平成30年度海外留学経験者追跡調査報告書 海外留学に関するアンケート」。(https://ryugaku.jasso.go.jp/link/link_statistics/link_statistics_2019.html, 2025.10.21)
- 日本学生支援機構、2020、「2018（平成30）年度日本人学生留学状況調査結果」。(https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2018.html, 2025.10.21)
- 日本経済団体連合会、2018、「2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果」。(https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf, 2025.10.21)
- 野村康、2017、『社会科学の考え方』名古屋大学出版会。
- Ogden, A. C., Streitwieser, B., and Van Mol, C., eds., 2021, *Education Abroad: Bridging Scholarship and Practice*, Routledge.
- Ong, A., 1999, *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*, Duke University Press.
- 太田知彩、2022、「なぜ留学するのか？－「グローバル人材」の再生産戦略に着目して」『教育社会学研究』110: 169-89。
- Parsons, T., 1964, *Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe

- (=1973、武田良三監訳、『社会構造とパーソナリティ』新泉社。)
- Sin, I.-L., 2009, “The Aspiration for Social Distinction: Malaysian Students in a British University”, *Studies in Higher Education*, 34(3): 285-99.
- Teichler, U., 2017, “Internationalisation Trends in Higher Education and the Changing Role of International Student Mobility”, *Journal of International Mobility*, 5(1): 177-216.
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議、2011、「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」。(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf, 2025.10.21)
- 正楽藍、2020、「大学生の留学動機と学習成果－汎用的技能に着目して」『大學教育研究』28: 11-27。
- 高澤陽二郎・松井賢二、2021、「正課内外での複数の文脈を経験した大学生の学びの意味づけに関する探索的検討－大学生の成長理論に照らして」『大学教育学会誌』43(2): 60-9。
- 高谷幸、2012、「自己充足的／道具的」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂、519。
- Weber, M., 1922, *Soziologische Grundbegriffe*, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr. (=1972、清水幾太郎訳、『社会学の根本概念』岩波書店。)

付記

本稿は、筆者が2019年に神戸大学大学院国際協力研究科に提出した博士論文「大学生の留学志向の形成に関する教育社会学的研究——社会的要因と職業達成に着目して」の第4章「大学生の留学志向の質的側面」第3節・第4節の一部をベースに、その後刊行された関連研究にも言及しながら再構成したものである。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K22239、24K16714 の助成を受けたものです。